みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

アイデンティティの模索と人類学者の立場：喬健報告に対するコメント

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2009-04-28
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 松澤, 員子
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001716

アイデンティティの模索と人類学者の立場

喬健報告に対するコメント

松澤　員子

喬健氏の報告は，台湾台東県のプユマの村，呂家社で行われた現地調査に基づき，1956年代と1970年，さらに1987年の30年余り間の文化変容，特にキリスト教の受容とそれからの離脱，伝統文化の消滅とその再興の実態を明らかにされている。その上で，多元的な文化の中での適応過程，あるいは文化の再構築過程で，人類学者の重要な役割として，「文化カウンセリング」という役割の重要性を提示された。私は1990年代にプユマの南王村や初鹿で毎年年末に行われている猿祭を取材したことはあるが，本格的なフィールドワークを行ったことがない。したがって，プユマに関してコメントすることはできないが，同じような文化変容の過程を台東県のパイワンの村々での現地調査で観察してきたので，ここではパイワンのケースを紹介しながら，コメントとしたい。

私が台東県下のパイワンの村で調査を始めたのは1971年のことである。それから今日まで毎年のごとくに現地で短期・長期の調査を重ねてきた。最初の頃，50歳以上の人々には日本の公民化教育の陰が色濃く残っていたように思う。「パイワンの頭目（mazamangilan，首長）は日本の天皇と同じ。」「私たちは頭目の命令には絶対従う。首狩りにも行く，山狩りにも行く。」というような言葉をしばしば聞いた。当時，戒厳令下にあって警察の目は厳しく，日本語の使用も禁止されていたが，村では流暢な日本語を話す人々が多く，酒席では必ず軍歌や大正・昭和初期の演歌が歌われた。日本統治期に儀礼の簡素化や廃止が強制されたことや当時の生活難の中で伝統的な行事はほとんど姿を消していた。他方，蒋介石政府は「文化工作隊」を編成し，原住民の村々を訪問しながら，新しい生活文化の紹介に努めていたのである。特に「平地山胞」と区分された人々は，資本主義経済の厳しい競争の只中で，生活苦にあえいでいる家庭が多かった。キリスト教の布教も，各教派が先を争っていたようで，太麻里に近い正興村（当時67戸）では新興キリスト教派を含め4つの教派が欧米からの中古衣料や食品を配給しながら，信者獲得競争を繰り広げていた。そうした状況の中で，正興村の首長家はかって配下にあった村人たちが異なる教派の信者となる中，自らは威信を保持する姿勢を崩してはいなかった。他方，首長家がまず天主教に改心し，やがて村人の多くが信者になるケースが多く見られた。首長家を中心とした村規模の粟の収穫祭が細々と続けられている状態であったが，伝統的な呪術は信者の間でも盛んに行われていた。また，首長の政治的権力は，日本統治期に剥奪されたが，その儀礼的権威はなお維持されていた（松澤 1976: 505-536参照）。

1970年代後半は，台湾の急速な経済成長に伴って，都市への出稼ぎが急増した。村で

日用雑貨や酒類を売る店が繁盛し始めたのはこの頃であり，店主の多くは外省人と呼ばれた漢人であった。都市から持ち帰られた現金は酒に変わり，時代の急速な変化に適応できない人々が手軽に入手できる酒に溺れていったのではないかと思う。私の調査に協力してくれた村の古老たちも数人集まって昼間から酒を酌み交わし，酔いつぶれることが多くなり，彼らの将来を危惧し始めていた。しかし，台湾経済の繁栄は，やがてパイワンの村人の経済を潤し，80 年前後にはテレビが普及し，国語としての中国語を話す年齢層が厚くなっていったのもこの頃であった。台東県下のパイワンは今もなお高雄や台中への出稼ぎが多い。都市には同郷の人々がその一角に集中して居住し，仕事を紹介したり，安価な住居を紹介したりするネットワークが出来上がっていたことが，後に都市原住民の調査で明らかになっていった。

キリスト教会の動向であるが，経済的ゆとりができるに伴って，初期の信者獲得競争から土着化に方向を転換してきたのではないかと，私は考える。一つは天主教を中心とする土着の文化の受容や新興キリスト教会を中心とする呪術的要素の強調である。他方，長老教会を中心とする政治的活動であり，原住民族の権利奪回運動へと連なっていく運動である。確かに，喬先生が指摘されるように，村の信者数は少なくなっていった。しかし，現在の原住民の文化再生運動や権利奪回運動の背景に諸教会が果たした役割を無視することはできない。

1987 年の戒厳令解除に伴って，原住民運動が彼ら自らの手によって展開され，活発になってきた。文化的側面においても伝統の創生という運動が強く押し出されている。さらに，原住民の人類学者や関連分野の研究者が育ち，自らの手で歴史や伝統文化を記録，出版するまでになっている。そうした状況の中で，私たちの研究を原住民の人々にどのように還元していけるのか，あるいは貢献してゆけるのかという喬健氏の問いに私は答えを見出すことはできない。ましてや，「文化カウンセリング」と言う概念の提唱には非常にむつかしい問題が内包されていると思う。原住民の人々が自身の伝統文化を再構築しようとする活動が活発になる中で，自分たちのアイデンティティを模索しているのではないだろうか。人類学者は自らの位置づけとその限界とを明確に意識することが必要ではなかろうか。

参考文献

松澤員子

1976 「東部パイワン族の家族と親族——ta-djaran（1つの路）の概念を中心として」『国立民族学博物館研究報告』1(3)。